

西遊夢錄

(八)

瀧川規一

蘇國の部

(IX) パースよりエザンバラまで

パースの宿で民謡論。小さい町を一巡して夕方宿に着くと何となく身體が倦怠を覺える。こんな處で病氣になつては行先が案じられると云ふやうな氣を起し、其晩はパースに過す食事後廊下や休憩室をうろ／＼してゐる。五十歳位な上品な紳士が話をもち出す。斯うした場合いつものやうに國籍調べから始まる。口問口答の査定をパスすると、いつの程よりか民謡の話となる。蘇國のバラッド(Ballad)を讀んだことがあるか、または蘇國のバラッドに興味を感じたことがあるかなどと質問は一步一步深く突き込んで来る。遂には例によつてバラッドの口誦をして斯んなのを知つてゐるかあんなのを知つてゐるかと止めを刺して来る。文句は知つてゐることば知つてゐても、それをどんな風に朗讀するか白人の口から然かもその産地にて聞くことに一入の興味を感じる。恭謙を装うて教を請ふ態度をとるに限る。紳士の懇切なる教はバラッドの起原論からばじまる。バラッドが元來民族から起つたもの

で、個々の作家の手になつた今日の詩歌と類を異にすると云ふやうな故國で文學の講義の際に幾度も繰り返へして來た話を聞かされる。概論的なバラッド論が一應すむと、蘇國に於ける個々のバラッドについて談は進む。或はスカンヂネヴィアやゲルマン人種共通のバラッドの題材を捉へて論ずる紳士の論鋒はその暗誦の強記と共に聽者を魅する。第一に朗讀したのは Sir Patrick Spence と題する民謡である。これは米國のハーヴァド大學の教授で民謡の蒐集者として有名な Mr. Child の編纂した民謡集にも、また詩に於て英國のローマンチズム興起の一因となつた Byron Percy の民謡集にも載せられてある有名な民謡である。Duneth's の町で王様が血色の葡萄酒を飲みながら「自分の船を操つて呉れる水夫をどこに求むべきか」と股肱の騎士に問はれる。騎士の推舉によつて王の委任を囑されたのが Sir Patrick Spence である。船の行衛はノルウェイであり、航海の目的は諾威王の娘を蘇國に連れ歸るにあるとも想像され、女王となる可き蘇國王の娘を諾威に連れ行くにあるとも想像される。斷片的な民謡には想像の餘地を充分に残して居る。兎にも角にも研究者の

與へた尤もらしい根拠ある話の筋は一二八一年に Alexander 三世の娘 Margaret が諸威王 Eric に結婚しその年の八月に多くの騎士及び貴族等に護られて夫君たる國王の許に送られた。然るにこれ等騎士達は歸りの船路に舳と共に海底の藻屑となつた。嫁した Margaret は二年後に女児を産んで死んだこの女児も亦名を Margaret と呼び五年後には蘇國の王位に即くことになつた。女兒は The Maid of Norway と俗に呼ばれた娘であつて、英蘭王の Edward 一世の長子と婚約がなり立つた。一二九〇年には諸威國へ使者を立てられ、王妃を連れ歸ることになつたが、二代目の Margaret は不幸にも蘇國へ歸る航海中船上にて死歿した、と云ふ、これまでは史實らしい話であるが、異本の歌によつては Patrick Spens がこの事件より二百年後に有名であつた提督 Sir Andrew Wood となつて居たり、または Patrick Spens が地方的に有名であつた現實の水夫の名となつてゐたりして居つて、研究者が若し史實如何を探究するならば只徒に迷宮に入るに過ぎぬ。Patrick Spens の性質上そんな研究は寧ろ岐路である。

朗讀した紳士は上述の如き六つかしい説明を加へたのではない。現執筆者の記憶に便する爲めにこゝに附記したのみである。紳士は機會があらば今日の Dumfries に行つて後日の參考の爲めにその地方の風物に接しよと勸めて呉れる。次に蘇國北方は勿論のこと Borderland の地方へ行くならば必ず蘇國の民話集を再讀せよと宛も先生が小供に教へるが如き態度で懇に教へて呉れる、紳士の名を尋ねたが謙抑して教へ

ない。パース行は實に有益なる暗示を吾に與へたのである。いつもならば思ひついたまゝ直に目的地へ走る處であつたが、遺憾ながらエ市までの直通切符の拘束を受けて再びダンパー市に戻らなければならなくなつた。

日本人のコーカニとて笑はれた宿に再び戻り、帳場の男を捉へてコーカニでなかつたことを立證すると、男は怪訝な様子を見せ、パースまで行つたのなら直ぐダムファリーンに行きそれからエザンバラへ行くのが近道で汽車賃も安かつたのに、それをしないとは妙な男だ、誰か待てゐる人でも居るのかと妙な處に勝手な想像を巡らしたと見えて一人で笑つてゐる。

タイの鐵橋も過ぎ Thornton Junction を經て海岸傳ひに Forth の鐵橋を渡ることになつた。成程人の喧しく云ふ程あつて徐行する車窓から鐵橋が彎曲した様子を見、よくも海中に墜落せぬものかなと時々我知らず冷汗をする。車内に居た夫妻小供連れの一団が小供を介して親しく話かけて来る。例によつて、「日本にもこんな鐵橋があるかと」の質問である。

「世界を廣く旅行してゐる身であるが日本國內は餘り旅行しないから知らない、或はあるかも知れないし無いかも知れない」と答へる。小供は十二三歳ばかりの娘で、自分の顔をはじろじろ見て居たが、早速自分の云つた言葉尻の There may be, or may not be を捕へて早速 That is a question と補足する仕方がないから、「おや、お前は婦人ハムレット」だと賞める小供を賞めた積りで云つた言葉を父親はどう解釋したの

か知らないが自分を指して You are a scholar と賞め返す。こんな問答をやつてゐる最中に列車は鐵橋のカーブに來たと見えて、ギョと軋る音と共に客車と客車とが接觸して、カタン／＼の音を物凄くする。それが次から次へと客車毎に繰り返す。夫妻小供の三人も自分も共に暫無言である。直線を走り出すと皆の者の話も平調にかへる。

父親は鐵橋の長さが七千二百九十五呎あつて、三百萬磅の巨費がかけられてあることや、この橋が Cantilever 式の橋で世界の最大橋であることな教へて呉れる。エナンバラからの橋を態々見物に來る客を載せて乗合自動車が出る程である然しその人等は決して對岸まで橋を渡らないで遠見してゐる丈けである。お前ばこちらからこちらへ全部渡つたのであるからエナンバラへ着いても大に得意になれる」とは父親が娘に説明してゐる言葉である。鐵橋を渡ることが何故にそんなに自慢するに値するのかと不審がるにも及ばぬ。同じ位の年齢の小供を連れて旅行する親が小供に教へる場合に白人國ながらも屢なす説明振りである。

「英蘭と蘇國とはどちらが好きか」と小供まで自分を捕へて質問の矢を向ける。「蘇國の方が好きだ」と自然に答へざるを得なくなつた。さう答へると父親は「どの點が好きか」と鋭く問ひ出す。英蘭では汽車中でこんな風に話しかけて呉れないから獨り旅の者は至つて物寂しく感ずる。その點は蘇國の人々の方が親切である」と答へる。英蘭人はいつも無言で人を馬鹿にしてゐる。それは私も同感だ」と父親は云ふ。何れ

の國にも親切なのもあれば不親切なのもあり一概に云へぬ。親切な人に幸に出會へばその國の印象までが一般によくなり偶々不親切な人に遭遇する時はその國一般が不快に感ぜられる。個々の場合をもつて全般を蔽ふことが出来ない」と思つてゐる持論はこの場合禁物である。普通なお世辭を普通のやうに云つてのけるのも修業の一である。旅の中はよろしく愉快にとめて思ひ、つとめて裝つてゐる間に鎖細な不愉快な事はいつの程か忘れて了ふ。

對岸の Dalmeny 驛を過ぎ身は Princess Street の停車場に降ろされた。停車すると共にポータを呼びストークスをホテルまで運べと命じた。一旦ひきうけて手車に乗せたが、向ふから來る米國婦人に呼び止められるや否や自分のストークスを投げ出して運搬を辭る。重いストークスを提げながら驛から直にホテルに登る。帳場には二十四五歳の女が居る。署名を求めるまでに、ベッドはシンゲルかダブルかと聞く。獨り旅の者はシンゲルに定つてゐる。妙なことを聞くもの哉と問うてゐると、ダブルだらうなと駄目を押す。駄目を押されたが何のことか解しないで、まだも勿論シンゲルだと答へる。それなら一寸開いて見ると云つて電話でホテルの本部へ聞き質してゐる。「二晩丈けならよいが、大抵のお客はダブルをとるのだが」と云ふ。「二晩でもよろしい」と云つて漸くのことださがる。

旅行季節のエナンバラ及びグラスゴでは酷い目にあふことがあるとは倫敦出發前から聞いてゐた。これが不快の最初の

出来事かと思ふと何となく末が恐ろしくなる。

エ市には兼れてからの旅行表に書き列ねられた見物の目的物が夥しくある。旅行記にあるが如くエ市を一日で見物したた附近を一日で見物すると云つたやうに自分に片付ける譯には行かないのみならず不案内の土地で而かも附近の田舎地方には文學上に攻究すべきものが無盡蔵にある。どれ一つも割愛することが出来ない。前夜安眠のお蔭で、市の内外の地圖を基礎にプランの立直しをやる。英島の如き一小國島を一跨げにしても大したことあるまいと高をくもつてゐたが、さて人口何十萬とある都會に足を踏み入れて直に翌朝から見物に出かけるのは餘程旅馴れた後でないと思ふ。況して見のがしのないやう、また落着いた心地で文學上の所見と實地とを結合して觀賞しやうと云ふやうな気分になると、單簡な説明の案内記だけでは満足出来なくなる。それやこれやで半日はエ市の机上研究となる。

エ市の東に聳ゆる山がある、樹木と云ふ可き程のものを見ざる八二二呎の丘である。頂上を Arthur's Seat と云ふ頂點から全市を下瞰したいと云ふ者が急に起る。案内記には山に向つて右方に道をとつて行けとある。つむじ曲りを發難した譯でもないが、行手の左に涇泉があり、山腹に石柱二三本物寂しく立つて居るのを見て足は自づと左に向ふ。羊の群は山腹帯に伺ひ放たれ、雜草を咬みながら友呼ぶ聲を立てゝある石柱はスコットの小説「The Heart of Midlothian」の中の出

來事と連想されて居る僧院の Anthony's Chapel の廢墟である。小説の梗概を云ふと、エ市の今はなき Tolbooth の牢獄に囚はれた身となつてゐる Effie Dens と云ふ若き婦人が兇殺しの罪にて審問される時に自らもまた腹違ひの姉の Jeanie も無實の證明を立てることが出来ない。死刑が不幸なる娘に宣告されるや姉はエ市より倫敦まで徒歩で行きアイカイル公に縋がりついて國王より大赦の恩命を頂くことが漸く出来た。吉報を齎らして家に歸るまでに妹は死刑を赦されて蘇國追放となり愛人の George Staunton と墮落ちする。姉妹は死刑囚の裁判席で顔を見合はして以來はじめて瀕を合はしたのは長年の後である。その間妹は Lady Staunton と名乗り、社交界の貴婦人として活躍する。共に出奔した夫君は貴族の地位を復活して時めいた生活を送る。その夫人がもとの兇殺しの Effie であるとは誰知る者もない。やがて姉の Jeanie は一僧侶の妻となり、偶然の事柄が縁となつて Effie の小供の猶生存して居ること、浮浪の徒の群に投じてあることを發見する。Sir George Staunton はこのことを耳にし自分の兒を惡黨の群より奪還せんと企てる。惡黨の群は當時有名なる Black Donald の率ゆるものであり、彼を捕縛せんとして戦闘をなす間に Sir George は the Whistler と云ふ字をもつ一少年によつて射殺される。この少年こそ彼の忘紀念の子供であつた。この報を得て母親は悲みの餘僧院に入る。これがスコットの小説の概要である。